

現代文化理論の再構成のために

——シユツツ理論の批判的検討——

米 田 公 則

1 はじめに

今日、社会理論において、個人と社会あるいは主観と客観との二元論的理解が多く問題性を孕み批判されているということについては、いまや常識と言ってもいいほどであろう。この二元論的理解に対する批判は、単に社会学に止まらず、様々な分野で問題とされている。その代表的な例をあげると、哲学分野においてはフッサールの現象学、いわゆる『危機』の書で指摘された「客観主義的科学」の持っている問題性について想起することで十分であろう。そしてこのことは社会学の分野で考えるならば、二元論的社会観に今日止まり続けるということは、「社会学の危機」が呼ばれた60年代の状況に対するグールドナーの弁を待つまでもなく、自ら危機的状況を克服できないでいるということを、告白するものであるともいえよう。

本来、人間は一方で社会によって作られる存在、存在被拘束的なものではあるが、他方人間は同時に社会の主体として社会自身を創造し、自らの理想を実現しようと社會に対して働きかける存在でもある。この両方向性は、社会と個人の関係を考えるものにとってあまりにも自明のことであり、あらゆる社会学者が明言することではあるが、決して十分に理論化できてきたとはいえないし、また決して容易なことでもない。しかし、その可能性は、まったくないということではない。そしてそれが可能となるのは、二元論的な社会と個人の関係の理解を克服してはじめてなされることではないだろうか。

しかし、本論文では、この「個人」と「社会」の関係性という問題を直接に論じるものではない。「個人」と「社会」の関連性の問題はあまりに巨大で、かつ抽象的なテーマであり、それを直接的に論じることは大変な課題であると言わねばならない。むしろ、そのような抽象的な論議ではなく、この問題を考えるために、「個人」と「社会」の中心的概念である人間の「行為」と「文化」の関係の側面に光をあて、それによってこれまでの二元論的社会理論を克服する土台を作ることが必要なではなかろうか。

従来、社会学において、「行為」と「文化」の概念は大変重要な概念として位置づけられてきたことは衆人の一致することであろう。しかし、今まで、社会学の領域においてこの両概念が同一次元において考察されてきたことはほとんどなかったのではないか。だが、それは、あ

る意味では当然と言えなくもないことである。なぜなら、行為の概念は、ウェーバーによってその理論的考察を開始されたのであるが、彼は、方法論的個人主義的立場を理論的出発点として、自らの理論の土台としたのである。そのような彼にとって、行為とは、理論的考察の第一の問題であり、彼の理論的性格を最も良く示しているものである。彼は、行為を「理解」という方法を通じて考察し、これによって社会学の基礎的理論を形成してきたのである。

これに対し文化についての理論は、デュルケームの宗教理論に代表されるように、「社会的事実」という概念をその軸として位置付け、人間に對し外在的なものとして、あるいは拘束的なものとして捉えられてきたのである。

この両者を比較してみた場合、ウェーバーは、方法論的個人主義的な理論的立場に立っているのに対し、デュルケームは、(社会的)全体主義的な立場に立っており、ウェーバーのそれをミクロ社会学的な視点からの出発として捉えるならば、デュルケームのそれは、マクロ社会学の立場であると言うこともできよう。いうなれば、この両者は対極に位置している社会学者であると言うこともできるのである。

このように考えると、「行為」と「文化」とを、同一次元で問題としようという試みは、大変無謀であるとも言うことができよう。しかし、現代社会学の理論において、行為の領域と文化的領域とをまったく別の次元の問題として捉えることに止まっているのであれば、社会学の従来から持っていた主体と客体、個人と社会との二元論的な理解を解決することができない今までいるということになろう。現に、現代の文化理論の多くは、それまでの文化理論から大きく展開し、「シンボルから記号へ」というロッシの著作の副題に現れているように、記号論的、あるいは意味論的な志向を強めているが、その一方で、人間の日常的行為に対する問題関心を希薄化させ、抽象論へと歩を進めているかのようである。⁽⁸⁾しかし勿論、現代文化理論を構築しようとするとき、意味論的視点を欠いた文化理論、社会理論のレベルに止まつてよいということではない。ギデンスは、今日社会理論は言語の問題を抜きにして語ることはできないという趣旨のことを述べているが、このことは、意味、そして意味空間の持つ社会学的意義が、広い意味において「文化」の問題と深いかかわりを持ち、社会学にとって避けて通ることのできない課題であると⁽⁴⁾いうことを意味している。しかしそれが、哲学的抽象論に陥るのではなく、真に新しい社会理論を構築するための基礎として位置づけられなければならない。そのためには、「行為」と「文化」の問題を別の次元のものとして論じるのではなく、その両者を関連性に注目し、同時にこの両概念自身に対しても批判的検討を行っていくことが必要なのである。

それでは、今日現代社会学において、「行為」と「文化」の領域を積極的に結合させようと言う試みにはどのようなものがあるのであろうか。その先駆的な試みとして捉えられるのが、シュツ以下現象学的社会学の試みではなかろうか。勿論、シュツ自身は、「行為」と「文化」の関連性とすることで、理論的な展開を進めたわけではない。特に「文化」という概念を通じ、

理論的構成をすることはなかったと言ってよい。しかし、彼の言う「意味的世界」とは、文化的なものそのものであることは言うまでもない。彼の理論は、それ自身、文化理論であると言うことも可能なのである。そして彼の理論がウェーバーの基本的概念である「行為」概念を出発点とし、現象学的手法を用いて、それまで自明視されていた間主観的世界に対して注目し、それを「生活世界」のレベルまで降りて主題化したという点で、シュツツは行為の次元と文化現象の本質的部分を規定する「意味的世界」に注目していた先駆的理論家であるということが可能なのではなかろうか。勿論、そのように考えるとき、シュツツの理論を批判、再構成しなければならないことは言うまでもない。

本論文は、前述の体系的な社会理論の構築のための基礎的作業として、現代社会学における行為の理論と文化の理論、この両者をリンクさせる理論的試みであるシュツツの現象学的社会学の理論に注目し、その批判的検討を通じて、新たな文化理論の構築の基礎を築くものである。

2 シュツツの社会的行為論

2.1 社会的行為論を巡って

アルフレッド・シュツツの生前の唯一の出版物である『社会的世界の意味構成』には、「ウェーバー社会学の現象学的分析」というサブタイトルがついている。これは、彼の理論の基本的性格を示していると言うこともできよう。すなわち、社会的事実の世界の把握には人間の社会的行為の理解が必要であり、それには、「個人の行為とその思念された意味内容を理解し、また個々の行為の解明を通してのみ社会科学は、社会的世界における個々の行為者の行為によって構成される例の社会関係や社会的形象の解明への手掛りをえるのである」。⁽⁵⁾よって、「理解社会学は、社会的行動様式の主観的な（すなわち、行為者ないし諸行為者によって思念された）意味の解明を主題とする一科学」⁽⁶⁾なのである。このようにシュツツは、ウェーバーの理解社会学を出発点とする。

しかし、シュツツは、ウェーバーの社会学的な基礎づけに満足するものではない。シュツツは次のように述べる。「彼（ウェーバー）は、世界一般が、従ってまた社会的世界の意味的現象が、素朴にも間主観的に一致するものとして仮定することで満足している。しかもそれは、日常生活において自分達の解釈と一致する同質的な外部世界が存在する、とわたし達が素朴に考えているのとまったく同じような仕方に於てである。……日常生活における「自明のもの」を何の吟味もせずに受け入れてしまうことは、社会学が重大な危険を背負うことにはかならない。……日常生活の社会的世界の諸観念が社会現象の一部を構成しているからには、この世界そのものが社会学の科学的加工の対象でなければならない」。⁽⁷⁾

シュツツのこの指摘は、彼の理論の α であり、 ω である。彼は、この指摘を出発点として、その意味を現象学的に（そして後にはジェームズの影響も受けつつ）解明し、それによりウェーバーを越えようとし、またそれ故に、様々の難問に直面するのである。

シュツは、この指摘にあるように、個人の主観的世界＝日常世界の社会的世界という図式を成立させている、素朴な主観性＝間主観性＝社会性＝客観性という関係に異議をはさむ。これにより、シュツは、パーソンズ流の社会的世界の認識とは決定的に決別することとなる。シュツの理解によれば、パーソンズ理論はまさに「ピグマリオン」なのである。⁽⁸⁾

この点で、シュツとパーソンズとの交流（基本的には書簡と言う形式での）は興味深いものと言える。しかし、この両者の交流は、結局十分な実りを結ばずに終る。パーソンズはシュツの理論に対し、「あなたの批判的分析は、いくつかの点でわたし自身の考えがすでに進んできた方向を指していますが、そのことで私は、自分自身の仕事をいささかも変える必要はないと思っています」と、その交流の早い段階から、両者が一致しないであろうことを表明している。

この両者の交流が不十分に終った理由については、本論文の主題から逸脱することになり、これ以上踏み込むことはしないが、歴史的に見た場合、パーソンズの社会理論が、一世を風靡した後、その理論の危機が叫ばれ、そのとき最も注目を集めた理論の一つとしてシュツの社会理論があったことは、パーソンズが性急に述べたようになんらの理論的発展の可能性がないということではなく、逆に、シュツ理論の中には、多くの可能性、問題性を含むものであったことを物語るものと言うことができよう。勿論、スマートも指摘するように、シュツの社会理論が、単純に、パーソンズの社会理論にとって変わるという認識は、基本的に誤りであろう。しかし、⁽¹⁰⁾ シュツの理論が、単に、パーソンズの構造機能主義を補完するものとしてのみ捉えてしまうこともまたシュツ理論の持つ発展性を閉ざすことともなる。

2.2 社会的行為と意味

それでは、シュツは、社会的行為をどのように分析し、ウェーバーの理解社会学をいかに発展させようとしたのであろうか。シュツの社会的行為論は、その社会的行為論批判から始まる。しかし、そこで注意しなければならない点は、その批判は行為論自身の根本的批判というものではなく、むしろその不十分さを指摘し、ウェーバー行為論の補強をしようというものである。シュツは前述のように、ウェーバーの理解社会学の基本的認識に対して同意している。

彼は、この基本的認識に同意した上で、その問題性を考察する。その問題性とは前述した、社会的世界の意味現象の素朴な間主観的一致という考え方である。彼によればこの素朴な一致という考え方は、言わば「自然的態度」なのであって、それ自身を括弧に入れ、検討しなければならないと考える。

しかし、この疑問点は、シュツ自身の理論に大きな課題をもたらす。つまり、主観による社会の構成を根拠づけなければならなくなるのである。彼の『社会的世界の意味構成』とは、そのための著作であった。しかし、はたしてこれは成功したのであろうか。彼の理論には、多くの疑問点が提出されている。そのひとつに、山口節郎氏の批判がある。彼は、シュツの間主観性の

問題に注目し、本質的には現象学的社会学の可能性にまで話が及んでいるが、ここで取り上げるのは、シュツの他我問題（間主観性の問題）である。山口は、シュツが「間主観的世界が構成されうるのは、対面的関係からのみ、つまり我々の中における世界の共通の生きられた経験からのみである。これだけが間主観的世界が引き出される唯一の地点である」と述べ、間主観性の問題を、<我一汝>関係を原型として考えていると捉える。しかしこの<我一汝>関係を保証する<視角の相互性>に対して山口は疑問を提出する。

この<視角の相互性>は、「立場の交換可能性」と「有意性体系の一貫」という二つの理念化によって可能になるのであるが、実はここに矛盾が発生してくる。つまり、視界の相互性による間主観性の基礎付け、すなわち「他我の一般的定立」と言っても、それ自身は、世界の間主観的構成ではなく、結局世界の主観的構成に止まっているというものである。そして山口によれば、「行為者の『主観的に思念された意味』に依拠しつつ社会的世界の再構成に立ち向かうとき、そこではこの『思念された意味』が、行為者によっては同時に思念されておらず、また行為者の<私的>な思念には還元されない、ある<公的>で共通の意味関連によって<侵食>されていることが見落とされてしまうのである。⁽¹¹⁾」というものである。

このような山口の見解に対し勿論反論もなされている。吉沢夏子氏は、このような意見に対し、シュツへのその批判も評価とともに従来の「主観一客観図式」の枠を前提とした読み方から生じるものであり、現象学的社会学は、むしろこののような図式を越えていくものであるというものと捉えている。

吉沢の反論は、シュツというよりもむしろフッサールを土台とした反論である。それは、フッサールの自我に対する考察を土台に、結局超越論的現象学をおし進めていくのであれば、「自我に固有なもの領域」には、現象学者が出発点としてたてた自我は、実は本来の自我ではなく、「自我が自我であるためには もともとの その中に他我の観念を含んでいなければならない」⁽¹²⁾というものである。その観点からすれば、シュツは、むしろ超越論的現象学を徹底できなかつたことは、批判されるものとなる。

シュツは、フッサールが超越論的態度を徹底させたのに対し、シュツは途中で超越論的態度を放棄し、超越論的現象学と決別し、超越論的間主観性の成立という事態そのものを認めない。シュツはこれに対し、学的営為を二つのレベル、すなわち、1) 超越論的レベルと、2) 内世界的レベルとに分けて捉えなおす。そして実は、シュツがこの両方のレベルを分離してとらえたところに、そしてまたこの両者の関係を十分検討することができなかつたところに、多くの批判が発生してくる原因があるのである。勿論、シュツにとっては、この内世界的レベルを設定し、それへの内属を問題にしたことは、フッサールとの決定的転換点であったということができる。そのために、間主観性の問題を超越論的主観から出発し、間主観的世界を構成するというところまで行き着かねばならないという難問が生じてくるのである。吉沢によれば、シュツ

における<二つのレベル>が一つであるような、そういう事態に思いを至ることができなかつたこと、そして、そのために超越論的な問いを停止したことが、シュツに対する決定的な批判なのである。

しかし、吉沢は、「シュツの学における<内世界的レベル>への内属という転換は、社会学においては、『間主観性』の問題を『基礎付け』の問題から解放し『社会学的』な問題として主題化する道を開いた」という意味で、やはり一つの展開をなしている」と述べる。⁽¹³⁾

だが、はたして吉沢の反論は、山口を納得させ得るものであろうか。それはシュツの理論に限って考える場合、決して十分になされているとはいえない。彼の理論は、常に、主観主義的な部分を残したままである。それはなぜか、あるいはシュツの理論には何が欠けているのであろうか。この点について、シュツの理論自身の中から、十分な検討がなされる必要がある。

そのためには、ここで視点を変えて考える必要がある。つまり、主観主義が出発をして、間主観的世界の構成を論じることが可能かどうか、という問題設定をするのではなく、むしろ、シュツが、社会的世界の意味構成、というときの「意味」にウエイトをおいて再検討される必要があるのでなかろうか。

それは、彼が「意味」の構成に言及するとき、「意味」のもつ意味についてその次元の位相を十分に検討していないということが大きな弱点になっているのである。シュツが意味あるいは意味理解に言及するとき、基本的に二つの次元を十分に検討していないものと考えられる。勿論、シュツは、「意味の層」という表現で、意味のレベルについて言及している。しかし、それは、論理的展開に従って層化されており、基本的には「社会的行為者」のレベルからの層化であり、よって「社会的行為者は、以上の全ての意味構造を理解することができる」という表現になってくる。よって「意味の層」とは、基本的に主観的立場からの層化であり、「意味」自身の特質からものではない。⁽¹⁴⁾

それでは、意味の位相についてどのようなことが考えられるのであろうか。それは第一に、主観的次元における「意味」概念である。これは、彼の理論の中で、他我問題、(間主観性の問題)を考えるとき、その出発点が、<我一汝>関係を軸として考察され、意味理解の問題として考えることのものである。

しかし、この位相のみで意味の問題を考えることは誤りである。意味とは、第二に、基本的には、<我一汝>関係を越えた、社会的世界での次元で、「意味」を構成しているのである。すなわち、意味の問題とは、基本的に間主観的なものなのである。意味とは、主観的なものではなく、それ自身において社会的なものであらざるをえない。間主観的であるからこそ、<我一汝>が関係を成立させることのできる「意味」を持つのである。

ところで、シュツは、すでにこの点について十分に認識しているものと考えられる。それは、次の点でわかる。

「ところで外界の諸々の現象は、我とか汝とか、BとかCとかにとって意味があるばかりでなく、この世界の中でお互い同士生活しているわたしたち全てにとっても意味がある。存在するのは、ただ一つの外的世界であり、誰にでも与えられている世界である。それ故自我によるこの世界の一切の意味付与は、この同じ世界を汝自身が体験において経験する意味付与を参照にしており、そのようにして意味は、間主観的な現象として構成されているのである」。⁽¹⁵⁾

しかしながら、シュツツのこの意味についての理解にはいくつかの問題点がある。彼は、この意味の問題に言及するとき、基本的に主観的意味と客観的意味とに分類し、依然主観一客観の図式の中でこの意味の問題に論及するのみである。そのため、彼は、この意味の論議をこれ以上展開しようとしている。なぜならこの以上の展開は、彼の矛盾を拡大することとなるからである。すなわち、主観的意味一客観的意味といった主観一客観図式に止まって論議を進めようとするならば、彼のウェーバーに対する疑問から出発した論議は、山口の批判に対して対応できないし、逆に、主観と客観の素朴な一致を容認するのであれば、そもそも彼の問い合わせ自身が無意味なものとなるからである。結局彼は、意味の間主観的性格に論及しながらも、それ以上この問題に立ち入ろうとしない。

このことは、別の角度から見ると、意味の主観的な意味づけではなく、社会的に現前する安定的存在としての意味的世界がすでに構成されているということになる。このことは、つきつめていけば、意味が、社会的に安定的な力として、つまり個人の意図的な主観を越えた存在（力を有した）としてあるということである。

ここで問題となってくるのは、社会的なものとしての意味を形成する力はどこに存在するのかと言うことである。彼は、意味を「構成」の視点から捉えているが、意味の「形成」についてなんら論究していない。意味の問題を「構成」と捉えるならば、それは個人的、主観的レベルから越え出ることは大変困難なことである。このことは、彼の意味論が基本的には主観一客観の図式を克服していないということの現れにはかならない。この点については、ここでは、その問題性を指摘するのみに止めておきたい。

このように考えると、シュツツの理論は、間主観的な自明的一致に疑問を呈しながら、そのじつ、ひそかに、間主観的な要素を忍び込ませているのである。というよりも、忍び込ませない限り、社会的世界についての言及は不可能なのである。シュツツの理論は、すでにその最初の段階から、大きな矛盾を抱えていたのである。

それでは、彼の理論の出発点である間主観性の主観との自明的一致に対する疑問は、何の意味も持たなかったのであろうか。また、間主観性のゼロ点として<我一汝>関係から理論的展開をはじめたことは、意味がなかったのであろうか。そうではない。彼は、論理展開上、関係の原型として、主観主義的立場からの<我一汝>関係の解明から出発せざるをえなかつたのではなかろうか。そうしない限り、間主観性を問題とすることはできなかつたとみる方が妥当であろう。こ

ここに、主観性は、間主観性を前提としなければならないけれども、間主観性に還元できない領域として主観的領域を設定することが可能になったのであり、それによって、いうなれば社会と個人はその意味的次元において<ズレ>を生じる可能性を潜在的に有しているのである。

2.3 行為と時間性

それでは、シュツは行為の主観的意味の問題をどのように捉え返すのであろうか。彼は、この問題を、「意味問題は時間問題」であるという認識を示し、その時間とは、物理学的な空間時間でもなく、外的な出来事に満たされた経過に止まるような歴史的な時間の問題でもなく、「内的時間意識」の問題であるといい、それは、「体験者にとって体験の意味が構成される、つねに固有の持続意識の問題である」と指摘する。⁽¹⁶⁾このような意味の問題は、内的時間の問題として捉え返される。彼はこの問題を、フッサールやベルグソンの哲学を土台に、時間性の問題として捉え返すのである。

シュツにとっての「意味」を考えると、意味とは、すなわち、「意味づけ」のことである。人間は、自ら自身の持続における有意味的な体験を構成し、意味づける。彼は、このことを、「過去把持」、「想起」、「再生」と言ったベルグソン流の用語を使いながら検討するが、そこでの基本的理解は、人間は自らの体験をそれ自身体験として理解し、意味を了解するのではなく、むしろ時間の流れの中での体験を構成し、それによって自らの行為を意味づけるというものである。

このことにより、行為は単に単位行為の問題を大きく越える可能性を開く。すなわち、我々の有意味的体験は、単一的である必要性がなく、むしろ有意味的に関連しているのが普通であり、複数の有意味的体験が単定立的な視線において高次の総合にまで構成され、統一体としてみることが可能になる。ここに体験をする自我の個性的な体験的世界が成立するのである。

このような意味と時間性との関連性は、新たな方向性を切り開く。すなわち、彼は、ここで主観的意味と客観的意味との関連性について言及する。彼は、客体を行為の産出物と捉えるが、この産出物の主観的意味について、「わたし達が、ある産出物の主観的意味について述べるのは、産出者の体験の異なる産出物に対してその体験が有するかまたは有した意味連関を一瞥する場合である。すなわち、その産出物の指定者のこうした体験が構築された複定立的作用を、わたし達の持続の同時性ないし準同時性において追試行することができる場合である。」と述べる。⁽¹⁷⁾

これに対して、客観的意味とは、「もっぱら産出物自体、つまり産出された物自体のすでに構成された意味連関に限られる。そこでは他者の意識における複定立的に構築する作用によってその産出物の産出過程は顧慮されないままである。」結局、客観的意味と主観的意味とは、「客観的意味はそのゆえ解釈者の意識にとって一つの意味連関であるにすぎないので、主観的意味はそれとならんでまたそれに加えて、指定者の意識にとっての一つの意味連関を参照するのである。」シ

ュッツによれば、主観的意味と客観的意味とは、結局意味の措定者が意味の構成過程を自らのものとしているかどうかという点に尽きる。

この時点では、彼は、主観的意味と客観的意味との関連性を十分に検討せず、彼自身間主観的な同一視に疑問をはさんだにもかかわらず、客観的意味の外在的存立についての検討は、所与のものとして前提している。勿論、これは、『社会的世界の意味構成』の段階のものであり、当然それは意味の構成に力点をおいており、その限りで客観的意味について言及したのであると言うこともできよう。しかしそれよりも、彼自身意味の問題についての検討が不十分であったということに起因していると考えるのが妥当であろう。

しかし、彼は、行為の意味を単に時間性の問題として考察し、捉えたのではない。行為の意味の問題を時間性の問題として捉え返すことは、意味の構成の問題だけでなく、むしろ、意味構成された社会的世界の問題へと地平を開くこととなる。

3 シュッツの現象学的社会的世界論

3.1 社会的世界論の構成

シュッツは、前述の行為の意味と時間性の概念を軸として、社会的世界の問題へと進んでいく。その出発点は、言うまでもなく前述したウェーバーに対する批判、素朴な社会的世界の意味的現象の間主観的一致に対する異議であったが、それは結局、社会的世界の多元性の問題へと進んでいく。社会的世界は、決して同質なものではなく、多様に分岐されたものという社会的世界の基本的理解は、この時間性と意味の構成的性格にその源を持っている。

しかし、シュッツ自身、社会的世界について十分に体系化された理論を展開したわけではなく、時期によって若干の相違が見られる。ここではまず、彼の主著に沿って見ていく。

シュッツによれば、社会的世界とは、基本的に<我>の側から問題にされる。よって社会的世界とは、我々と他者との関係において、1) 社会的直接世界。2) 社会的同时世界。3) 社会的前世界。4) 社会的後世界。と分類される。

1) は、直接世界における他我を同僚として特徴付け、2) の同時世界においては、他我を同時代人として特徴付ける。この両者の相違は、「私は同僚とともに生きながら同僚と同僚の体験を体験するのに、私は同時代人のもとで生きながら同時代人については、同時代人の類型的な体験経過を推測したり、しかも相当な根拠に基づいて推測したりできるにしても、自己所持においてはこれを把握していないということ」である。⁽²⁰⁾

これにたいし、社会的前世界の領域は、歴史の領域であり、「私は思索を向けることができても、行為を向けることができない」領域である。これに対して社会的後世界は、「私」がいなくとも成立している世界である。

それでは、社会的直接世界では、どのようにして他我と関係を成立させているのであろうか。

それは我々関係において、私と汝との直接環境が同一であることを根本的な要因として成立する直接世界の共通性に基づく。社会的同時世界では、「同時世界的な社会関係の中の行為者達は、双方の行為が相互に関係づけられているということだけを予期する」ものであり、そういう意味で、「匿名化過程」の中にある世界である。このような世界では、他我との関係は、時間的空間的に非直接的な関係があるので、そこでは「理念型」として他我と関係する。

彼はここで、「人格の理念型」という表現をし、他者をその人格の理念型において捉える人間関係の成立を示している。そこでは、人間関係は、結局理念型間の関係ということになり、それが匿名的な関係となり、同時世界において匿名性と理念型によって成立する社会関係を見ることとなる。このことは、また「彼ら関係において、人格の理念型がいよいよ匿名的になればなるほど、ますます高度に同時世界的考察について他者体験が定位づけられる主観的意味連関は、客観的意味連関にとって替えられる」⁽²¹⁾のである。

このような理解からは、社会的前世界は、簡単に導き出すことができる。社会的前世界は、全世界の経験は、過去の知識の蓄積であり、匿名的なものである。

ここでのシュツの展開する社会的世界は、基本的に二つのポイントがある。それは、第一に、「理念型」の問題であり、第二に、「匿名性」の問題である。

理念型の問題は、勿論彼が理論的出発点としたウェーバーに基づくものであるが、それに止まらない内容を持っている。それは、「客観的意味連関」のこととほぼ同義であるが、それは、単に客観的意味連関を主観的意味連関という区別に内容的には止まっていない。それは、彼は、主観的意味連関を社会的直接世界において成立するものと捉えているがそれはつきつめれば、主観的意味連関とは、結局、状況を考慮して、状況の中で成立する意味連関であり、客観的意味連関とは、すなわち状況に依存しない意味の連関であると言う内容が含まれているということがわかる。主観的とはすなわち、「状況依存的意味解釈」であり、客観的とは、「状況非依存的意味解釈」のことである。

第二のポイントは、「匿名性」の問題である。シュツは、匿名性の概念を用いて、同時世界が単純に一元的な世界ではなく、むしろ匿名性の程度に応じて階層化された世界であるということを示した。これにより、人により、同時世界の意味が相違することが可能であり、個人においては単純にその外部世界が一致するものではないが、他方、この匿名性により、最も理念化された外部世界の領域においては、個人間の意味理解の相違は最小となるものと考えることができる。このように捉えると、社会的世界はその外部に最も安定した層を形成しているという認識をシュツが持っているということがわかるのである。

3. 2 多元的現実と日常的生活世界

前節で述べたように、個人にとって社会的世界は、様々な層で個人に相対してくる。しかし、

この社会的世界は、他我との関係性の中で問題とされる世界であり、そのためそこで基軸となっているのは、時間性の概念である。シュツは、時間性の概念を軸に社会的世界を区分しており、そのためそれは、社会的世界を把握する上でやはり一面的であると言わねばならない。彼は、この見解を発展させ、時間性の問題からむしろ空間性における社会的世界の問題へと理論を開拓する。彼は、これを社会科学方法論との関係で論じ、基本的には常識的世界と科学的世界とを対比的に捉えている。

そこで問題とされるのは、「現実」ということである。現実とは、主体による構成物であり、「現実を構成しているのは、諸々の対象の存在論的な構造ではなくて、我々の諸経験のもつ意味」⁽²²⁾である。よって、現実性とは、諸々の限定された意味領域である。多元的現実とは、多様な意味領域をもつ現実のことである。しかし、そこでの多様な現実は、単に同一平面上にならぶものではない。そこで取り上げられるのが、「日常生活世界」である。彼によれば、それは、「我々が生まれるはるか以前から存在し、我々の先行者である他者達によって、すでに組織された世界として経験され解釈された、相互主観的な世界のこと」であり、これは、経験と解釈にとって所与であり、「この世界についての解釈は全て、この世界に対して以前なされた経験の集積に基づいて行われる」のであり、「そうした経験が、『利用可能な知識』と言う形態をとることによって、準拠図式として機能する」⁽²³⁾のである。

しかし、この世界は、それだけに止まらない。そして、この世界は「自然的態度にとってこの世界は、はじめから、個々人の私的な世界ではなくわれわれ全てに共通する相互主観的世界であり、我々が、理論的な関心ではなく優れて実践的関心を向ける世界なのである。」⁽²⁴⁾よって、この世界は、静的なものではなく、他方においては「我々が、この世界において他の人々の間で追求している目的を実現しようとすれば、我々はこの世界を支配しなければならず、またそれと同時に、この世界を変化させねばならない」のであり、この世界は、我々が実践的にかかわりを持つつ形成している世界である。

だが、この日常生活世界は、単層的なものではない。この日常生活世界は、「至高の現実」としての労働の世界がある。それではシュツの捉える労働とは何か。労働とは、「企図に基づきながら外的 세계においてなされる行為のことであり、これまで記述してきた自生性の全ての形態のうちで、日常生活世界という現実の構成にとって最も重要なのは、この労働という形態である。」そして、「十分に目覚めた自己は、自らの労働の中で、また自らの労働を通して、自分と現在と過去と未来をある特定の時間次元に統合」し、「十分に目覚めた自己が自分自身を一つの全体性としてはっきりと認識するのは、自らの労働行為に於てであり、そうして自己が他者たちと意思の疎通をするのも、日常生活の世界の様々な空間的ペースベクトリズムを組織するのも、労働行為を通してである。」⁽²⁵⁾

そして、「労働の世界は、自然的態度にとって何よりもまず思惟の対象ではなく、支配の領野」

であり、我々は、この世界に対して優れて実践的な関心を向けるのである。しかし、ここで見逃してはならない点は、シュツが社会の多元的現実、日常生活世界などといった領域に言及する場合、基本的にはその現実は、主観的視点からのものであるということを依然有しているという点である。彼は、「現実を構成しているのは、諸々の対象の存在論的な構造ではなくて、諸体験のもつ意味」⁽²⁶⁾であると述べている。

3. 3 日常的生活世界論の問題点

前節において、日常生活世界、特に至高の現実としての労働の世界を論究してきた。この説明を見ると彼の日常生活世界、労働の世界についての視点はなんら問題ないかのようである。しかし、詳細に検討してみると、多くの問題が伏在しているのである。

その第一は、彼が、「労働の世界」に言及する点である。彼の労働とは、決して一般に使われるものではなく、同時に労働の概念に混乱が見られる。彼が言う労働とは、前述したように、「企図に基づきながら外的世界においてなされる行為」であるとすれば、そこで問題とされるのは、企図をもつ主体であり、その人が外的世界に対してなんらかの行為をするならば、それは、「労働」と言うことになる。そのように考えると、労働の世界とは、人間の活動が行われている世界一般と同義のものとなる。それは、労働の世界での社会的関係が、つまり賃労働と資本の関係を軸として関係が社会全体にとって意味構成の軸となるということではまったくない。そのように考えると、「労働の世界」という表現をするとき、それは誤解を招くものである。現に、シュツの影響を受けた「現象学的社会学」の流れを組む理論家たちが「日常生活世界」を問題とするとき、ほとんど、労働を視野の外におき、研究の対象としない。それは、彼が「労働」という表現を使ったこと自身にかなり無理があったと言えるのではないか。彼が、「労働」を問題とするとき、結局それは「行為」にほかならないのである。

しかし他面で彼は、労働は、外的世界に対し実践的に支配するものとして指定されている。このとき、労働とは、実践そのものである。しかしこれは、必ずしも、上記の労働の中身である、意味的要素がなくとも可能なものであり、行為と同義のものではない。シュツは、その労働の概念の中に密かに、これまでの流れとは違ったものを忍び込ませているのである。彼は、これを、「生」の視点から、展開している。人間は、その生の根源的欲求としてみずから身体的な活動を通して外的環境とかかわりあう。それによって人間は自らの「生」を維持しているのである。しかし、この論議はあまりに哲学的である。

それに加え、彼の「労働」についての論議は、基本的に主観的視点からのみ問題とされる。本来労働とは、間主観的に有意味であるからこそ、個人的活動として行われるのであり、逆に考えれば、間主観的に無意味であるようなもの、それが例え個人的に有意味であっても、社会的には、一般に労働とは呼ばれない。そのように考えると、シュツの言う「労働」とは、主観的に

有意味な、外的環境に対する働きかけという視点を最も重要視しているのである。

勿論、シュツツは、労働が、個人的なものではないということは、認識していた。シュツツ自身は、その労働が、主観的ではなく、社会的であることを述べるために、「生の緊張」ということを述べ、労働が生の最大の緊張をもって外的世界に対して働きかけるものであり、それは、他我にとどまらず実際に行行為を見ることにより、観察可能であり、それによってその社会的に正当であることを常識によって検証されることを例示している。それ故、シュツツは、労働の世界を、「至高の現実」と述べ、それが日常生活世界の核をなしているということを述べている。

しかし、はたしてシュツツの言うように、「至高の現実」としての労働の世界、そしてそれを核とする社会的世界に対する理解はこれでよいのだろうか。下田は、シュツツの理論に対して、「シュツツの言う日常的生活世界は、大変、長閑な平和的世界であるという印象を与える」とい、そこでは「利害対立のない、また世界観の対立のない平和な世界」であり、「⁽²⁷⁾シュツツの知識論（常識論）においては、かかる意味での知識そのもののダイナミズム、常識を巡る日常的生活世界でのコンフリクトといった視点は、ほとんど重要視されていない」という批判を行っている。それは、なぜか。その理由は、シュツツの社会的世界論は、主観的に構成された意味的世界を軸とした世界であるのであり、基本的には、その社会は、意味的社会であるので、そこでのコンフリクトは、問題とされえないのである。

確かに、シュツツは主観的ではなく、間主観的なものを内在している。しかし、彼はそれを指摘するのみである。そして、意味的世界以外の要素、「労働」の要素を加えこれまでのものとは違った社会論の可能性を開いている。しかしまたそれも、「労働」の主観的理解を基礎としており、それを越える可能性を指摘するのみである。彼は、つねに、主観的レベルから問題を考察し、社会的レベルでの一貫した理論的展開を行いえていない。あるいは、つねに、主観的レベルに引きずられているということもできよう。

言うまでもないことであるが、シュツツの社会的世界論は、人間の生の営みである日常的生活世界の多元性に注目した点では、大変大きな意味があった。そして、その日常生活世界は、決して同一的ではなく、「意味」と言う概念を展開することによってその生活に社会的レベルではなく、個人的レベルでの生活世界が、意味的に構成され、それ故に自明的には、この両方のレベルを同一視することができないと言うことの論理を見事に展開したと言えよう。しかし、彼の日常生活世界の考え方は下田氏が指摘するように、きわめて調和的な、矛盾のない社会的世界であるということが言える。

4 シュツツ理論の可能性と限界

前節において、シュツツの日常生活世界論の問題性を考察してきた。結局、それは、下田が論及するように、それ自体きわめて調和的なものでしかない。それでは、なぜこのように彼の理論

は調和的なものとなってしまい、一面的な社会理論となってしまうのであろうか。そしてそれを乗り越える可能性はどこにあるのだろうか。それは、次の三点にまとめることができよう。

その第一は、「意味」の問題である。シュツは、意味理解の問題に注目し、それまでの意味に対する「自然的態度」を括弧に入れ、それにより、社会的な次元とは異なる主観的に意味構成することが可能である次元を解明した。彼はこれを時間的には主に「意味構成」という概念により、体験の時間的構成に注目し、空間的には、「社会的世界」という概念を軸として社会的世界の多元性を解明したのである。

しかし、シュツは、意味の「形成」の問題を十分に理論的に解明することができずにいる。シュツは正しくも、「意味」の問題を「意味づけ」の問題であると指摘している。しかし、彼は、実際に意味を問題とするとき、意味とは構成の対象であり、意味を構成されるものという視点で捉えるならば、それは、主観的なものとならざるをえない。意味とは、社会的事象の意味づけであるということは、決して構成の問題のみではなく、「形成」の問題として捉えることが必要である。すなわち、社会的事象の意味づけとは、主観のレベルで考えるならば、「構成」であり、社会的、集団的、組織的レベルで考えるならば、「形成」が問題となる。

この「構成」と「形成」という視点の相違は、同時に時間性の問題にも新たな可能性を切り開く。社会的世界の「意味構成」においては、時間性の問題は、意味構成に基本であるが、それは基本的には、自我のレベルからのものであり、他我との間主観的意味の構成は大変大きな困難を伴う。集団的意味形成の視点から時間性の問題を捉えるならば、それは、すでに最初から個人的なものではなく、集団的なものであり、それ故、意味形成は、集団による時間と空間との意味づけということになる。

シュツの「意味」の考察をみていくと、依然として「主観一客観」の図式を脱していないことがわかる。彼は、一方で、意味構成を、主観主義的に論じるが、他方で、社会的理論に論及するとき、社会的に安定した力として、個人の意図的な主観を越えた存在、間主観的な世界が存在していることを十分認識していない。そしてこの両者の関係性についての理論的考察は、決して満足のいくものではない。

第二には、第一の指摘と関連していることであるが、意味の形成には、力の問題を視野に入れなければならないということである。にもかかわらず、シュツの理論には、この点を十分に理論化することができていない。なるほど、意味の構成という視点から見ると、主観的に外的世界に対し、意味づけを行うことも可能である。しかし、それは、社会的には無意味である。社会的事象がどのように意味づけられているかということは、確かに日常生活の視点から見るならば、すでに間主観的な常識として所与のものであり、それ自体課題とされない。しかし、意味とは、意味づけである限り、つねに変化する可能性を潜在的に持っている。意味づけがどのように行われるかということは、集団論的な力の問題を内在させているということに、注目しておかなければならぬ。

ければならないことである。

この問題は下田の指摘する「コンフリクト」をその理論内に取り込むことのできないということとも深く関わっている。「コンフリクト」の発生する社会的背景ということを問題としないにしても、彼の理論では、意味的世界の次元においても、コンフリクトの問題を十分に検討することができない。前述のように、主観的な外的世界の意味づけは、社会的には無意味である。よって、個人がどのように外的世界にたいして意味を付与したとしても、それ自身コンフリクトを生む要因とならない。それが、他者との意味の相違となってはじめて問題とされるのであるが、それも結局、間主観的に安定的な常識の世界において結審されることとなる。このように考えると、シュツツの理論は「コンフリクト」を扱うことは、極めて困難であるということがわかる。

第三には、これらの背景として、シュツツの生活世界論は、その基本的認識は、意識的生活の領域に限られて理論化されているということである。つまり、これは行為規定と深い関わりを持つものであるが、彼は、人間の生活を人間の認識可能な領域、つまり、意識的生活の領域にとどめていたのである。確かに、彼が労働を至高の現実として捉え、そこに意識の側面を越えた現実に対してもなりの認識を持っていたということはできよう。しかし、前述したように、彼は、「労働」の問題を十分に理論化することはできなかった。本来の日常的生活世界は、むしろ慣習化された多くの部分により形成されており、基本的には実践的行動を基盤とし、それによって、社会的関係が物象化され、形象化されるのである。つまり、人間の実践行為は、人間の意識する領域を越えたものとして考えられなければならないのである。そこに、調和的ではなく、むしろ矛盾を内包している社会の現実的諸相がでてくるのである。したがって、社会全体（或は全体社会）を考えるとき、間主観的な人間の関係の層の中に、基本的に二つの層があるという理論的設定をしておいたほうが、社会を考えるにき有効なのではないだろうか。すなわち、人間の意識に捉えられている層と、人間の意識には必ずしも捉えられていない層とである。人間は、その意識的活動において、社会的世界を形成し、その中で生活している。しかし、それは、常識のレベルのものであり、そのレベルでは捉えられないレベルがあるのである。

最後に、シュツツの理論の本質的な弱点について論及したい。それは、シュツツの理論の展開上出発点としている個人と社会との関係性の問題である。シュツツの理論は、主観主義的な性格を克服する可能性を内包していたとしても、現実的には、それを引きずっていると言わねばならない。それは、特に、彼の社会的行為の基本的な認識に現れている。彼の行為の理論は、基本的にウェーバーと同様の土台の上に立ったものであるので、行為は、意味理解の対象としてはじめて問題とされることとなる。しかし、それでは、行為の持つ他の側面、すなわち、主観的であれ、間主観的であれ、人間の主観的意識を越えた行為のもつ実践的な意味というものについての検討がなされないこととなる。ウェーバーに於ては社会的世界の意味的現象が素朴に間主観的に一致するという自明性に基づいて論理を展開したために、社会的世界は、社会的行為から何の矛

盾もなく論理的展開をすることができたのである。それに対して、シュツは、それに疑問を投げかけ、論理を展開しようとしたのであるから、行為を意味的世界の中で捉えようとしつつ、他方で、社会的世界の開かれた可能性に対する論究を必要とするのである。そのため、社会的世界に一步足を踏みいれれば、そこでは、人間の意味理解の領域を越えた実践的領域が存在するのである。それは、それまでの「行為」という概念では、汲みつくせないものである。彼は、たしかにこの間の主観性の問題に論究した理論家であったということは、高く評価されてよい。彼は、間主観的領域を論じてはいるが、そのとき、間主観性の意味的領域に矮小化し、間主観性の実践的領域に対し十分な論述がなされていない。私は、この点について暫定的に、前者の意味的領域を「間主観性」と呼び、後者の実践的領域を「間主体性」と呼ぶこととしたい。彼は、この両者の区別を十分に行わずに、論理を展開しているのである。

勿論、彼は、社会的行為を社会的世界の中で問題としたのであって、それを越えた理解は、誤りであるということもできよう。しかし、もしそのような理解に止まっていたのでは、シュツが、間主観性を問題とし、生活世界にまで理論を展開させたことの意義、その可能性を十分に汲みつくしたということはできない。

シュツの社会的行為論は、主観主義という批判に代表されるように、多くの難点がある。しかし、彼は、それまでの自明視されていた主観性と間主観性との素朴な一致に対し批判を加えたことは、大きな貢献であり、これまでにない地平を切り開くこととなった。勿論、それには、彼の「行為」、「意味」にとって概念の根本的批判を通じてはあるが、そのような限界を有しつつも、これまで十分検討されてこなかった「行為」の問題と「文化」の問題、その関連性について考察する基礎を築いたものとして高く評価されてよいであろう。

註

- (1) Gouldner, A.W. *The Coming Crisis of Western Sociology*, (New York : Basic Book, 1970)
A. W. グルードナー,『社会学の再生を求めて』新曜社 岡田, 田中共訳 1974 p. 5
- (2) 勿論、行為論と文化論を統合しようと言う試みがなかったわけではない。社会学の領域において、その代表的試みは言うまでもなく、ペーソンズの社会理論である。この試みについては、ハバーマスも、高く評価する点である。しかし、このこと把握この両者の統合の試みが成功したと言うことを意味するわけではない。この点については、ハバーマス,『コミュニケーション的行為の理論』参照。
またその他の試みとして、マルクス主義の理論がある。
- (3) 現代の文化人類学など、人類学系統では、この傾向が強い。現代文化人類学の批判的考察については、別に機会に行うこととしたい。
- (4) Giddens, A. *New Rules of Sociological Method* (London : Hutchinson 1976) A. ギデンス
『社会学の新しい方法基準』而立書房 松尾, 藤井, 小幡共訳 1987 p. 3
- (5) Schutz, A. *Der Sinnhafte Aufbau der Sozialen Welt* (Frankfurt : Suhrkamp, 1932) A. シュツ,『社会的世界の意味構成』木鐸社 佐藤嘉一訳 p. 17
- (6) 同上 p. 17
- (7) 同上 p. 20

- (8) 浜日出夫, 「ピグマリオンとメデューサ——A, シュツの『現象学的社会学』の位置——」, 『社会学評論』129 1982, 33, No. 1 を参照
- (9) スポロンデル編, 『社会理論の構成』, p. 159
- (10) Smart, B. *Sociology, Phenomenology and Marxian Analysis.* (London : R. k. p. 1976) 参照
- (11) 山口節郎 『社会と意味』 勉草書房 1982 p. 187 その他, 次の文献も参照のこと。『『現象学的』社会学は, 現象学的か』, 『社会学評論』127, 1981, 32, No. 3「第9章 間主観性の社会学」, 『基礎社会学』二巻, 社会過程 安田, 塩原, 富永, 吉田編, 1981
- (12) 吉沢夏子. 「社会学と間主観性問題」・『社会学評論』138, 1984, 35, No. 2 p. 11
- (13) 同上 p. 11~12
- (14) シュツ, 前掲書。p. 27
- (15) 同上 p. 47
- (16) 同上 p. 24
- (17) 同上 p. 186
- (18) 同上 p. 186
- (19) 同上 p. 187
- (20) 同上 p. 198
- (21) 同上 p. 271
- (22) シュツ著作集, 第二巻『社会的現実の問題 [2]』 M. ナタンソン編 マルジュ社 1985年, p. 38
- (23) 同上 p. 10
- (24) 同上 p. 11
- (25) 同上 p. 15
- (26) 同上 p. 38
- (27) 下田直春『社会学的思考の基礎』新泉社 1978 p. 122~3